

松本英忠著

卷之三

小學農家讀本

明治十二年

文榮堂

一月版權免許

有恒堂

梓

小學農家讀本卷三

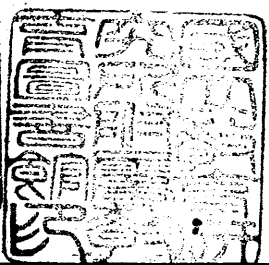
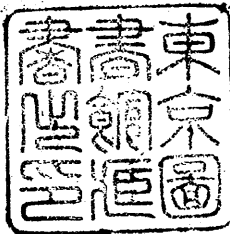
松本英忠 編纂

第一 茶

茶へ、古より、我國に産をせども、僧榮西、支那の種を傳へ、僧明惠、これを播き植ゑてより、上下一般の飲料となりて、其製法、漸く精し、方今、外國貿易品の、一なるを以て、製せざるの地、なきまで不至れども、尚舊に仍りて、山城、宇治の産を最とす、茶に、無色、本色、紅茶、緑茶、黒茶等の別ありども、是を、其製法よりりて、名を異ふるのみ、

農家讀本

卷之三





茶子を播くふハ、十二月下旬より翌年三月までの間に於て、其法たる、圃壞し、周圍、九二尺五六寸深、三四寸許の、環状なる穴を穿ち、腐草、又ハ、厩糞等を撒布して、其上、茶子五六十顆を播下し、粒々、相重層せきらし、是、軽く土を被ふ、おれを株播、又ハ、環播と稱ふ、其他、直線、序を違ひて、播下せる者あり、是を、継播と云ふ、其、五六月の候に至り、發生も、沃地

ある時ハ、三四年の後、始、其葉を、摘み取ることを得可し、然れども、瘠地不在る者ハ、五六年の後、摘収せる、残廢と云、摘芽より九三十日前に、肥料を施すこと有り、是を、色付茶といふ、十月より十二月の候にハ、多量の肥料を施し、七八月炎暑の際ハ、却て、肥料を施さざる残りとす、採収の後ハ、茶樹の梢頭を刈り、長短、相等しからしむ可し、是を、園刈といふ、

摘採の期ハ、土地の氣候、歳の寒暖により、發芽の遲速、而して、一定し難しと雖も、毎年、立夏前後

の候哉、良期と云、大約廿日間ふして、悉く摘み畢
る可し、

茶葉を摘採するに、毎日、午前六時より、午前十
時の間に於て、すなはち最上とをり、一人、一日の勞
力を以て、葉量一貫目を摘むに、度と云、量多きは、
疎をせむ、鹿葉多く、撰擇不便ならん、

製茶の業へ、大別して、是を四目に分つ、乃ち、蒸葉、
焙乾、篩分、貯存、是なり、

蒸葉 ○ 初は、生葉を蒸すに、二個の蒸籠を用ゐ、
序を逐ひ交換す、其法、茶葉を甲の蒸籠に投し、釜



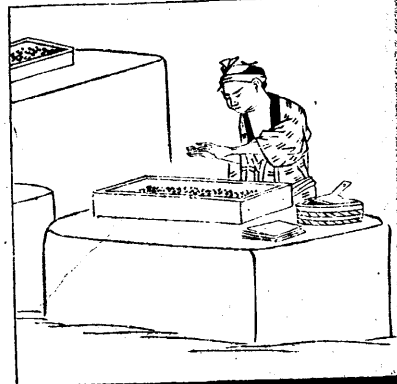
上を載せ、一分時間ふし
て、其蓋を開き、箸にて茶
葉を攪拌し、蓋を覆ひ、又
一分時間を経て、之を攪
拌すること、初の如く、
蒸氣の、遍く全葉に透徹
して、茶葉の、稍柔軟となり、箸端に懸着する時、乙
の蒸籠と交換す、甲の蒸籠へ、其傍なる冷板の上
に散布し、扇を用ゐ、冷して後、之を筵に移す、
焙乾 ○ 火の度を節するに、以て、緊要とならん、炭量

凡四貫五百目を、爐中に投じ、木葉を撒布し、火氣の暴烈を防ぎ、且、永く火氣を保持せしむ、之を烘箱を載せ、嚮に、蒸了せる茶葉を入せ、兩手にて、攪拌し、茶葉、稍熱を受くる不及びて、燃臺を烘箱に



架し、之を茶葉を移し、兩掌を用ゐて、粗茶葉を攪拌さざり、蒸氣稍醒た、茶葉攪り了れば、之を烘箱に分散し、茶葉、再び温氣を生じせ

は、兩掌を狭み、搓摩さるゝと、數回、茶葉の粘塊を解散して止む、之を一番焙爐といひ、又水揉と云、次に、茶葉の粗大なる者を太り、再び、烘箱に入せ、兩掌を、搓摩し、茶葉を、一、拳縮せざらむ、葉色、稍黒を帯び、



指頭にて、之を試むる、少しく摧折するに、到るを適度とす、是れ「ハシ」又ハ、二番焙爐といふ、篩分〇索にて、大篩を屋上より垂下し、茶葉を投

し、掌を以て之を、翻攪すること、數回なれば、莖葉相折れ、嫩葉と、粉葉とへ、下に墜ち、莖と大葉とへ、篩中に留る、是を、莖切と云ふ、

下を墜ちとる、嫩葉と、粉葉とを、中篩に入れ、之を、沙汰するときへ、全葉皆折れ、悉く下に落つ、是を、勻篩と云ふ、

又、前の如くして小篩を入れ、沙汰をれば、芽葉と、粉葉の二種へ、落下し、正茶のみ、篩中に留まるなり、然して、粉葉と、芽葉とを、分ち、芽葉と、正茶を、烘箱に入れて、攪拌をすれば、茶葉全く乾定し、始て、

生臭の氣を脱し、新香、鼻を穿つて至る、是を、三番焙爐、又、「大入」と云ふ、

是に至りて、茶莖及び粗葉へ、箸を以て、拾ひ取り、正茶を精撰す、

貯存 ○精撰の正茶を、再び烘箱に入れ、温氣の微をもつ及びて、麩を収め、周縁を糊封して、倉庫に藏す、梅雨の候、更に、焙爐に上せ、兩手にて、攪拌し、乾燥せしめ、再び麩を収む、

以上、説く所へ、宇治製の大畧を以て、製茶法の一斑を、示すに過ぎず、其他、本茶、紅茶、製造の畧を、

尤も述べ、宇治製の正茶を再製して、専ら海外へ輸出する者、棧木色茶といふ之を製するも、先づ茶を鐵製の熱釜中に入れ、武火を以て、熬り、乾燥せしめ、其適度を得て、淺綠色を生せしむるなり、



紅茶へ茶葉の最柔軟なる者を摘み、蓆上へ攤開して、太陽へ乾晒するの後、手棧を以て、之を揉み、帆

木綿又へ厚き布を蔽ひて、再び日光へ晒し、茶葉の變りて、褐色と為る棧候ひ、且揉み、且乾し、竟に焙爐へ上せて烘成す、之を印度式といふ、専ら外國に輸出して、貿易品と為れ、

第二 養蠶

養蠶へ、農家の、尤利益ある業ありて、方今貿易上必要なる所の蠶種、及び生茶等の生ずる基なれば、人々能く注意して、精良の品類を製す可し、養蠶へ、上野、信濃、甲斐、武藏、近江、磐城、岩代、陸前、羽前、但馬等の諸國を、最盛大となし、其他諸州に於

ても、六、大、小、増殖、法、計、る、所、り、



茲、小、採、録、ま、る、諸、説、ハ、岩、
代、國、伊、達、の、養、法、な、る、故、
以、て、各、地、方、小、より、或、ハ、
必、差、あ、ら、ん、さ、れ、ど、も、實、
地、小、就、て、經、験、し、發、明、
さ、に、所、ら、ざ、ら、ば、術、の、老、
練、な、る、者、小、あ、ら、ば、さ、ら、ば、
茲、小、只、其、一、班、故、示、
の、み、

養蠶の法たる、種々なりといへども、其要、蠶室の

設け、完全なると、桑田、肥沃、し、て、培、養、其、宜、し、き、
不、適、ま、る、と、養、蠶、者、の、老、練、な、る、と、お、り、

蠶室ハ、大小、方位に拘らば、四方、小、窓を設け、時々、
開閉して、空氣を流通せし、て、室内の氣候、故、調、和、
す、る、を、要、し、若し、烟、氣、或、ハ、
蒸、發、氣、等、の、室内、小、充、塞、
さ、る、と、所、を、大、に、蠶、兒、の、
生、育、故、害、す、

蠶室の西、小、樹木、の、陰、翳、等、
多、く、し、て、常、に、夕、陽、を、受、く、



その地ハ、殊更、空氣の流通をよくに可し、
蒸熱、厳しけむハ、蠶兒の腦上、放光して、殭るゝあ
り、三眠、四眠の時期、尤之を忌む、又、漢間、みりて、亭
午も、猶、太陽の光線、到らざる處の如きハ、節蠶、及
び、不整不眠等の、諸病、不、罹る者、必、多しとす、
桑葉ハ、前日、必、摘み來りて、之を貯へ、凋萎せざ
るまじ、或、務む可し、摘み採りて、直に、之を與ふる
時ハ、液汁多き故、蠶兒の濕を招く憂あり、
夫れ、蠶の孵化、未、直、桑葉、食ハざるを、猶、産
兒の、初、乳より、乳汁を、哺まざると、同一理なれば、

生れて、二三日間ハ、桑を與へざるも、害なし、
掃卵、或、為、紙ハ、先、羽、簾を以て、徐、紙背、附
着したる、蠶を、掃下し、羽、簾、不、蒙、座の、全面に、勻
布して、疎、稠、を、くら、り、然、後、桑葉を、與ふ、桑
葉ハ、なる、可く、細に、剉み、篩、上、せて、細粗、お、ら
し、む、し、掃卵の後ハ、務、是、て、蠶、座、或、して、乾燥、な
ら、む、を、要、に、

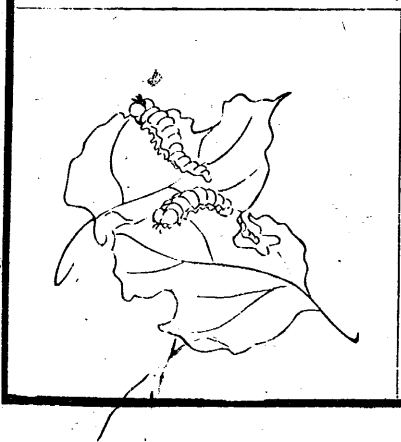
初眠の期、至、れ、バ、卵、紙、一、枚の、蠶を、八、九、枚、乃、至、
十、枚、分、つ、可し、眠、蠶を、分、ち、了、れ、バ、飼、料の、刺、否、
蠶、揃、ら、ば、遠、く、桑、葉、或、與、ふ、之を、居、並、桑、とい、ふ、

蠶兒の初起、少しく見ゆる小至るまで、數回、飼料を與ふ之を、催青桑と云ふ、

初起蠶、七八分小及一バ、少量の桑を與ふ、之を桑付と云ふ、桑付の後、起蠶座を設け、其桑小上る者を聚先て、他の葉座小移し、

大小桑を與ふ、之を食感と稱ふ、

二眠の蠶、見ゆれば、初眠の時、八九枚小て、養ひとる者哉、又十六枚、乃至廿二三枚



小、分賦し、桑量を減し、間斷なく、催眠桑を與ふ、三眠蠶小、至れば、其數小從ひ、三十五六枚、乃至四十四五枚小、分座す、蠶の五六分起くる後、見ても、少く桑を與ふ、之は、中桑と云ふ、四眠も亦同く、間斷なく、飼料を充分與つて、飽足さしむるなり、

老蠶、少しく見ゆれば、必し、殊更小、飼料を増加す可し、充分小、桑食を促して、老たる前ハ、蠶緯、稀疎ありて、緒頭、錯亂の患あり、

老蠶を、箔小入る、ハ、九方、三尺の箔小、五百頭



を度と成に、繭を収むるに
 試み繭を耳朶に付して
 之を揺かまふ、繭内、籜々の
 色朽る者ハ、既に蛹に化ま
 るの徴ありて、隱々微動を
 聽くハ、未だ化せざるなり、
 繭を裁むるハ、繭四外を葉座に排勾し、紙を其
 上に蓋ひて、太陽に曝きこと、三四日ありて、蛹の
 死するを待ち、日没ありて、家にお納せ、
 繭を撲ふハ、毎粒、手もて拈り、厚薄なく、繭の中

心判然として、兩端、堅牢なる者、上等となし、試み
 此繭、三針許成聚光、手もて、之を攪拌せば、自ら沈
 重ありて、軽浮ありて、其色、明潔ありて、潤澤ある
 を以て知る可し、

繭を撰ぶハ、横皺、縦皺、大皺、中皺、縹紗様皺、の五種
 あり、其中、絲繭の第一等ハ、縹紗様皺ありて、絲の
 細くして、且つ美麗なるものと、恰も、縹紗の如し、是
 も、其名の因て、出る所なり、之に亞く者を、横皺と
 曰、其他の三品ハ、稍、劣れ不劣あり、
 春蠶の外、夏蠶、秋蠶、及び、野蠶繭の種類あり、

第三 蠟 榿

蠟ハ、榿、榿の二樹より製レ、復、日用の要品なる枝
以テ、農家ニ培養シテ、其利益多シ、西國ニテハ、東
ラ、榿を植エテ、蠟を製出ス、

榿樹ハ、雄雌の別アリ、雄樹の砧ハ、雌樹を、接着セ
ルむるを第一トス、

播實ハ、十年餘を経ルハ、あらざレバ、結實セバ、故
ニ、接木成ルルニ、其樹砧枝、培植スルハ、榿實を
播キテ、三年の後、之を樹砧トシ、良種枝接キ、更ハ
三年を経て、之を移植スレバ、五年より、實枝結

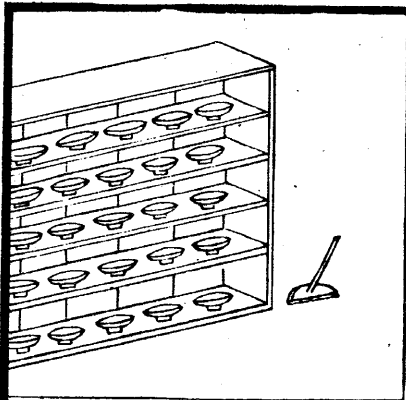


小、

蠟を製スルハ、先ツ、連翹
枝以テ、榿實を打碎シ、篩メ
テ、篩過シ、其遺漏セシ者ハ、
石臼ニテ、搗キ碎キ、釜ハ入
キテ、之を蒸レ、次ハ、搾槽ハ

移シ、搦子を挿シテ、之枝連打シ、搾ルオト、三四の
後、鍋内に、澱在スル蠟汁を、酌取り、之枝數箇の磁
皿ハ、分チ盛リ、棚架ハ、排置シ、冷定凝結スルを待
テ、筒ハ、入道、之枝貯ル、是枝、生蠟ト為レ、

晒蠟ハ、生蠟と、少量の水とを、大釜中に入れ、煮し
 了り、大桶に移し、更し、小桶に分置し、微温湯と、灰
 汁少許と、糞、入きて、之を搅拌均匀、又、三斤餘を容る
 可き、桶に分ち、凝結したる者を、篩上へ排布し、太



陽に乾すこと、十日許、復釜
 に入きて一煮し、再び出し
 て、日光に晒す、水分全く脱
 する後、更に、大釜に投し、煮
 解し、又、桶に移して、後、皿に
 分け盛りて、凝結さし、之

を、取て、箱に貯ふ、

漆樹を、培養するに、亦播實本根の二法あり、分根
 を、十月下旬より、翌年三月の間、於て、漆根の肥
 旺せる者、伐斫り、一尺の長となし、之を、田畔、又ハ、
 河堤等に、斜挿し、地上、僅し
 一寸許、露出せしむ、凡二
 旬ありて、發芽す、
 播實の法ハ、十月下旬、漆子
 熟して、黄褐色となり、とる
 時、収斂置き、翌年二月中、數



十日間、流水に浸し、三月苗地に播下は、若し種を
 水に浸さざるときは、生長よろしくは、故に水
 に乏しき地の地底を、一尺許の深さまで穿ち、種を
 埋先置き、種期に臨みて、掘出れも害なくといふ、
 一坪の地は、播下せる種子は、五合を適當といふ、豫
 先、一尺の深さまで耕耘し、播種し了らば、堆肥を撒
 布し、其上を軽く土を掩ふ、苗地乾燥し過くれば、
 汚水残澆くを、漆苗長して三寸許なる時、之を
 枝起して、他園に移れ、
 分根せる者ハ、七八年を経過て、樹の周圍、六七寸と

ありし時、始めて漆液を取る可し、其播實なる
 者ハ、九十年を度とす、
 播實分根とも、二尺許は、成長せし時、地表二寸を
 残し、伐採すれば、新芽を生じて、成育尤も速かな
 り、
 漆樹を栽培するに忌むる常は、烈風ある地、又ハ、
 杉林及び茅の生ざる所ありて、其他ハ、地味を擇
 むべきに似たり、
 蠟燭取るを主とする、漆樹ハ、樞と同一く樹の雌
 雄を、既別を可しといふとも、漆液を取るの地の

雌雄採擇ハ、

分根ハ、生長速カナレ共、樹根ハ、限りある哉、以て、
多く伐れば、枯死するの憂アリ、漆樹の液、多き哉、
「マギ」と稱え、液少きを「石木」と稱ふ、其液量の多少
を計り、價値を定む、液量の
多少哉、檢するハ、樹皮ハ
刃痕を付して、之を試むな
り、俗ハ、之を「コツクイ」とい
ふ、

初先ハ、撥く哉、目立、又ハ、根

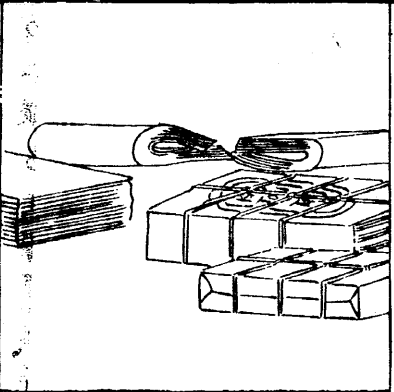


刈りと稱し、地上、六寸許の表皮を削り、平滑なら
し老、潤、三四寸許の横線を、其中央ハ劃し、之ハ斫
痕を付れり、四日を経て、漆液始きて、滲出する
者なれば、此時、初期の斫痕より、上下に二線、裁畫
し、鐵篋ふて、其滲出する白液、採撥き取り、之を筒
中に收め、序採逐ひて、他樹ハ及ぶ、五六樹を撥く
の後、再び、當初の樹ハ就き、其舊痕より、滲出する
液汁を収む、此時、液汁、栗色ハ變をり、時間、若し少
く後、一、時ハ、乍ち、變して、黒色、現せり、之ハ
「マギ」稱れ、其量の減るる哉、以て、撥手ハ、尤、其適

度、誤味さる枝要に、
 凡て、撥手ハ、前條の如く、餘地ある樹皮ハ、悉く
 線裁付し、普く液を撥き了りて後、其樹を伐り、枝
 を断ち、長裁三尺許とあり、太陽ハ乾きこと、數日、
 其斫痕ハ、滲出さる漆液の凝結して黒色ハ變を
 るを待ちて、之裁、水ハ浸そと、五、六日、左手に漆
 樹を持ち、右手ハ庖刀を執り、斫痕を付し、セシメ
 籠みて、其漆液を撥き、以て、小桶の中ハ収む、
 漆液ハ、別ハ製造を加へ、桶ハ移すの後、密封に
 せバ、十年を経るも、其原質を變ることなし、

第四 紙

紙の類多し、其精良なる者、裁奉書、雁皮、鳥の子と
 其、他、程村、杉原、西の内、美濃紙、半紙等、可共、需
 用の最多きハ、美濃紙、半紙を第一とす、



紙を抄く原質ハ、楮、結香の
 二種ありて、雁皮紙ハ、菘花
 皮、六分、楮皮、四分を混合し、
 西洋紙ハ、綿布、麻布等の、零
 片みなまり、
 楮を栽培するハ、雁條、分根

の二様あり、播實ハ、成育の遲きを以て、利あり、
 歴條をさるゝハ、三月下旬、楮樹の根邊を耕起して、
 稀糞糞澆き、楮樹の枝梢を、垂懸して、土糞蓋ふよ
 と、厚、三寸許、而して、少しく梢尖を露出さし、翌
 年三月に至り、根鬚茂生する時、これを三四寸の
 長に切りて、別圃に移植を、茎の分根の法ハ、先づ
 畦を作り、稀糞糞施し、長根を四寸許に截り、之を
 抑栽す、十餘日おいて、新芽を發し、十月中旬、枝條
 三尺許に至る茂、截取をれば、翌年、又、其遺株より、
 更なる數條の新幹を發するなり、

結香ハ、六月上旬、結實を以て、其實を採取し
 て、直に遮る包み、乾濕の地を埋地、翌年三月、苗地
 に播下を、九月十日おいて發芽す、其翌、三月、別圃
 に移し、又、其翌三月、黄花茂着く、其容粗、菊に似
 り、花謝して、實茂結ぶ、初冬
 て、伐採をすることを得可し、
 紙を敷するハ、楮樹の皮
 の厚き部分を撰び、流水に
 浸すこと、一夜、翌日お至り、
 乱踏して、外皮を剥脱し、小

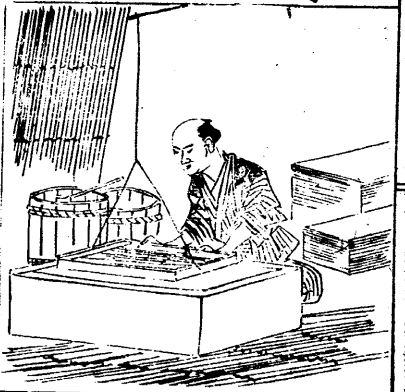


刀裁以て、其次ある茶色の薄皮を削り去り、水不
て、洗ふこと、一時間許、斯くて二晝夜、曝したる後、
流水に浸きおと、又一日、即、蠣灰、及び、清水、裁以て、
楮皮を煮、復、流水に浸すこと、一晝夜、再び、不良の
皮を肥除し、石砧に上をて、敲碎し、綿絮の如くな
らば、先、雪白色と為りたる者を、第一等の紙料と
為し、斯くて、おの紙料四斤、米糊、裁調和し、清水
一斛を、盛りとる抄紙槽に投し、捧ふて攪拌する
こと、百回餘ありて、框に抄簾を敷き、兩手にて持
ち、槽中不就きて、蕩起するること、八回、既ふて、框

裁脱し、紙ハ簾と共に、左傍に設くる板砧に、覆置
し、簾表より、棍棒を一轉して、簾裁剥き取り、葉心
一條を、紙の前縁に押し、一葉の分界とし、逐次抄
紙す、一日十槽分裁累積し、壓木裁懸け、翌日不至
り、水分全く去る裁、見て、葉心を摘み、一葉毎に乾
板に貼り、山茶の生葉を以て、能く擦り着け、日光
に乾したる者を、奉書紙とて、其他、概稱、此法に類
あり、唯糊を和せば、其法裁畧するより、半紙と
なり、美濃紙とちるの差あるのみ、

西洋紙を抄くふハ、綿布、麻布の零片裁撰り分ち

塵芥を除き去り、之を二三寸の大ふ切り、其量十友ふ苛性曹達、六百三十目許を加え、釜にて煮ること、凡二十時間ありて、平盤ふかち、洗淨をること數回、其濁汁の盡る候ひ、漂白盤に移し、漂白粉と、少量の硫酸を加へ、紙料雪白色と為るを度と、水分を去り、搗盤ふかち、糜爛を、明礬及び松脂乳を調勻し、槽に入れて、抄成をるなり、



第五 大麻 苧麻 木綿

大麻ハ、高燥の埴土、苧好む、前年十一月、中、小、厩肥を、土中、小埋、是置き、翌三月、ふ至り、土塊、苧碎きて、地表を平し、四月上旬、播種を、播種の際ハ、十分、小、肥料を施す、播種の後ハ、更ふ與へざる者、とす、發芽の後ハ、毎旬、其不良ありて、尪弱なる苗と、雜草をば、抜き、きること數回、務めて、直長を、さかる、必要に、

収獲の期ハ、大暑の初、是、ふ於て、為に可し、必、此、時期を誤るべからば、蓋し、大麻の莖、大暑の前ハ、

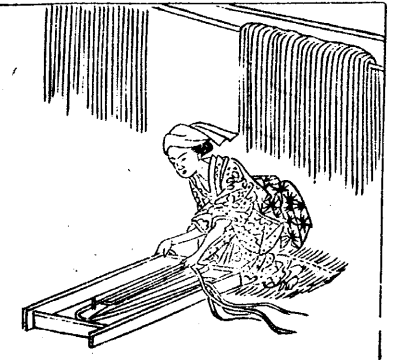
脆弱みりて、大暑十日、我經れば、硬強ふ過ぎ、紡織の用に適きば、されば、収獲の適度、我得るまじと、尤緊要なり。



大麻を晒まふハ、晴日、我擇ひて、麻の根、及び、葉を、忝りて、之を、長六尺、四五寸と、為し、再、扁刀、以て、茎末、我切り、板架、不載、きて、根を、齊一、束、糸、て、小把、となし、湯浸、處、不搬、出、に、次、不、鐵炮、桶、我、適宜の地に居、湯の沸騰

〜る我候ひ、麻を浸すこと五分時間、以て、取出し、又、太陽、不、乾、ま、と、一日、乃至、三日、と、若し、陰翳、ふより、容易く、乾燥、され、て、三日、我、經過、を、怠、ば、麻色、を、損、する、が、故、不、毎日、熱湯、不、浸、す、こと、緊要、なり。

麻の、全く、乾定、したる、時、九、三百本、を、束、揚、て、麻槽、不、浸し、雜草、或、ハ、杉葉、等を、土、上、不、撒布、し、麻、を、其、上、不、排、列、し、葉、筵、にて、之、我、覆、ひ、鬱、蒸



をくむること、凡二日間然る後一二本成合せて、皮を剥き取り、其皮を水中に浸し直し、麻引臺に載せ、ヒキコふて、粗皮を摩擦し去り、之を竹に掛り、背陰の處に於て、乾燥せしむ。

苧麻ハ、數十年、一處を定めて、之を栽ち、他に移植さざらず、年々、其宿根より、新條を出せ、されども、宿根盤結すれば、終不良芽茂生さざるを以て、四月中旬、別圃に分栽す可し、其長五尺、若しくハ、七尺に至る時、之を採採収れ、其上品ハ、綿綿の素質不元つ、越後上布等是なり。

黄麻も亦、大麻、苧麻に亞く、植物なり、六月上旬、種子を下し、八月下旬、刈収れ、此苧皮を乾かすハ、大に晴雨を閑する候以て、一日の晴雨をとり、品位を定む、荷繩と為し、或ハ、席を織る所の、經緯線不用ゐて、強靱なること、苧麻に亞けり、其吉利國、ダンテ地方にてハ、大に之を栽培して、其勢、殆ど、亞麻層と、頽頑するに至れりと云ふ、亞麻も亦、大麻と同く、其纖維を以て、麻布を製し、綵線の美麗なるハ、大麻に優せり、且つ、其價も亦貴し。

亞麻の實を、亞麻子と稱し、小鳥を飼ふ可く、又、油
を搾して、燈火に用ゐる、食用に供することを得る
なり、

其他、尚、葛麻の種類有り、其用、復、大麻、亞麻等、不次
くとり、

木綿布ハ、農家必需の衣料
なり、尤も、欠く可らざる
の要品とす、

木綿布ハ、草綿を以て、織成
す、故に、第一に、棉花の栽



培を畧説し、其次、機織の概要を述ぶ、

草綿ハ、五月の候、種を下し、又、水糞を施し、然して
後、耕耘をすること數回、小暑の前、於て、棉の梢頭
を摘採して、之を乾燥せしむ、趕綿器を用ゐて、核
を去り、綿莢と爲し、又、之を打綿弓にて、弾解し、然
る後、綿筒となし、之を紡車の上せ、引き針り、繰
とち、筭、を捲きて、經架、を絡ひ、經絲の用、を充つ、
然して、之を鍋の中に入せ、暫時、煮て、其適度を測り、
乾かして、糊を施し、炭齒、を貫き、木櫛、を以て、線條
を織り、機、を楔、を挿み、機に登せ、緯絲を、筭、を捲き、梭

の中、小押し、左右より、交際の間、投じて、之を織成す。織成の後、其布を漂白するに、其端を、木綿糸にて縫留せ、大釜に入れて、之を煮、木白くして、之を掃くると、數回又水に石灰少許を加へ、浸漬すること二日許、更に清水で濯ぎ、漂し乾かすを法とす。

第六 蓼藍 山靛 紅藍花

農家も栽培して、利益ある所の染料ハ、蓼藍等の數種とす。

蓼藍ハ、阿波の産物第一といひ、藍苗を養ふ可き地ハ、藍田一反ハ、十歩の比例とせり。

春分前、ふりつれハ、藍子ハ水で注ぎ、晴日を擇みて、延に攤け、日光を受けしは、然る後、之を苗地に播き、足不て、地表を踏み、砂土を其上に撒布し、三週の後、嫩芽發する候、待ちて、始めて、白魚滓末、及び、糟粕肥料を施し、毎旬之を施して、三回不至る。



下種の後、七十五日内外、苗の長、五七寸、不及ぶとき、麥圃の間へ移し、之を中植といふ。此際、



直に肥料を施し、又毎旬必
び之を施す、

移栽より、七十五日後経て、
之を刈る、再び其舊株より、
再生する新苗を培養し、三
四十日にして、又之を刈取

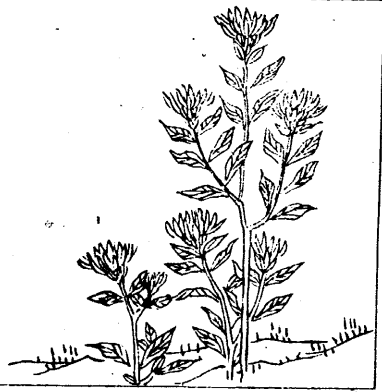
す是を二番藍といふ、其後不生する後、三番藍と
稱れ、

藍刈刈取む、即夜、小斧にて其葉を細く剉み、翌
日、之を筵上へ攤開し、正午に至りて、竹耙、或は、箒

を用ゐて、之を攪拌すること、三四時間、其色漸く、
蒼黒に變る候に、莖葉を篩ひ分ちて、苞を納
め、以て藍靛を製するの料とす、

山靛、一は、琉球藍と稱れ、元來、琉球の所産なりて、
高燥の地を好み、砂土を交へたる白墳に、自生し、
三月の末、宿根を分ち植へ、或は、四五月間、雨中に
乗して、地に押し、足みて、堅く土を踏む時、根自
ら生じ、翌年五月に至り、其葉を摘み、藍葉を、白に
て搗爛し、其汁を搾りて、瓶に入き、染料不用の、其
色最美艶なりて、屢洗濯するも、褪色するあとな

し、蓋し、薩摩飛白及び上布等ハ之を以て染むる
と云ふ



紅藍花莖栽培する所ハ、秋分より寒露の候ハ於
て種子を播下れ、尤多量の肥料ヲ要する植物ナ
リ、寒時より早春よいくる
まで、一二回、跟脚にて根傍
ヲ踏む可し、其法、小麥を培
殖するが如し、抑、紅花ハ、一
回栽培する圃ハ、五六年を
経る所無くざれば、再植を

可らぬ

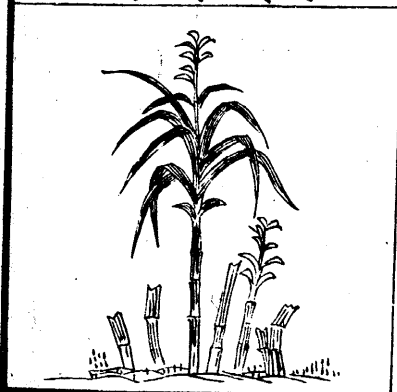
花を採る所ハ、六月中旬、隔日ハ、曉花侵し、露を帶
ひて、之を摘むなり、若し、太陽出でて、露晞く時ハ、
花瓣、束針の如く、指を刺して、痛甚し、

紅花ハ、近來、價格、大ニ低下シ、他の植物を、作るの
利益ハ、若かざるヲ以て、栽培する者、甚々少クナリ

第七 砂糖

砂糖も、日用欠く可らざる要品なり、専ら、甘蔗
より、製造するを以て、暖地に住する農民ハ、之ヲ
耕作して、最利益あり、

甘蔗ハ、暖地ニ適當スル植物ナリ、嚴寒ノ頃霜降り、風寒キキバ、樹幹或損ず、之ヲ注意シテ、收期ヲ早くシテ刈取サレバ、甘味鮮多シトシ、甘蔗ヲ栽培スルハ、其莖末三十許ヲ伐リ採リ、地或掘ルこと、深六尺、之ハ莖ヲ駢列シ、一列毎ニ、砂ヲ布キ、重移ク、數層不至キハ、更ニ、砂或被ふこと、厚二尺、葉或、其上ニ覆ヒテ、貯蓄ス、之ヲ蔗苗トシ、



翌年四月、圃園ノ土塊或、能ク均碎シ、一尺五寸ノ距離毎ニ、蔗苗ヲ押し、薄ク土或掩ヒ、直ニ、水肥ヲ澆ク、

肥料ハ、油滓ヲ第一トシ、其施肥ノ期ヲ、三次トセリ、十二月中、悉ク、甘蔗ノ葉或、刈リ、然ル後、之ヲ刈取ル、凡一反ノ蔗田、而テ、甘蔗、七百斤ヲ獲ル或、普通ノ収量トス、

砂糖ヲ製造スルハ、甘蔗ノ莖末ヲ棄テ、其莖幹ヲ壓搾シテ、液汁或得、之ヲ濾過シ、少許ノ石灰ヲ加ヘ、盆中ニ入キ、煎煉スルこと、數時、漸々、

火勢を減し、屢之を攪拌し、其釜底に焦着する炭防く、

既にお敷了せし所の者へ、他へ移し、其冷定まる炭待て、樽へ貯ふ、

凡、甘蔗、三百二十貫目の液汁を、三石六斗と一之を煎熟して、得る所の砂糖炭、二十八貫八百目と、液汁、六斗毎に、石灰一合を、加ふの割合なりとす、

白糖、三盆白、棒砂糖、氷砂糖等へ、是炭、再三、精撰して、雪白色となり、凝結せしむ、其他、舶來砂糖の如

きは、漂白するに、牛骨炭用ゐるおと有り、と、

第八 烟草

烟草も、亦、需用多き品にて、近來、貿易品として、多量を輸出せねば、其地味により、之を栽培して、大

小利益有り、とす、

烟草へ、薩摩を第一と一、肥後の阿蘇、阿波の三好等、之を亞く、

烟草炭栽培するに、毎反五坪の、苗地を要し、苗地は、



烟草の葉

肥伏地伏の二法あり、地伏ハ烟草の品質茂、保全
するの効りれども、發芽較遅し、故ハ、近來、農家ハ、
大率、肥伏茂用ゐるとり、

苗地を設くるの後ハ、地面乾燥する毎ハ、土塊茂
切碎シ、肥料を與フ、苗地をシテ、適宜の濕潤あら
しむフ、翌年二月ハ至リ、種子茂播下シ、

烟草の種子ハ、極劣て微細なるを以て、撒布する
に、疎密ある茂免かば、故ハ、種子を播如んとさ
ハ、葉灰等ハ和シ、手ハ拵みて撒布シ、務劣て、勻平
ならシむ可シ、然れども、肥料の多きハ、却て、發生

に害ありとす、

此苗地ハ、播く種子の用量ハ、通常烟管の、火盆ハ、
盛る程の量を、五十杯とシ、又、前年、若シ、虫害、或ハ、
暴風雨等ハ、種子の欠之るときハ、舊種子に
ても妨けず、

種子茂撒下し了らハ、宜ク、
麥稈等を、地表ハ敷キ、細
竹ハ、之茂按え、是れ
種子の、風ハ吹き去らば、又
ハ、鳥ハ啄發せらるゝの患



を防ぎ、且、地中、適宜の滋潤を含有せしめ、兼て、霜防くが為なり、

三月中旬より、発生せし、全く覆ふ所の麥稈、
拔、日々雜草を耘、耨し、苗の尪弱、若くは、不良
なる者を、抜き去り、晴日、腐水、澆灌き、適宜の
滋潤を含有し、可し、

早歳、小遇ひ、苗の發生不良なるか、或は、發生均し
からざれば、陰翳、又は、微雨の日を擇み、其稠密な
る苗、拔起して、其稀疎なる所、補植可し、五
月中、小至り、苗、五六寸、成長せし時、一齊に別圃

に移栽可し、
前宵、雨、或得て、移栽する、第一の良法なれど、
も、時期、小より、必以、降雨を期しかと、然る時、
夕陽を待ち、水を苗地、澆灌き、適宜、滋潤を帯
し、其後、之、拔起可し、

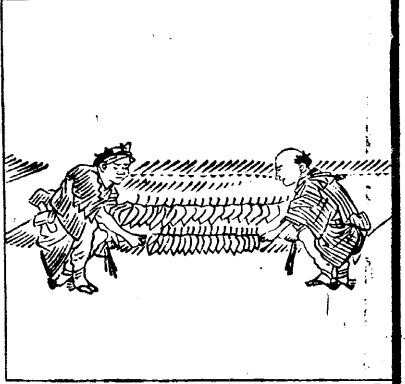
分栽するの地、其前、肥料を施し、斜、苗を挿
し、周邊の土、澆培去、麥稈、根の周圍を覆ふ、是
を、太陽の直射を防ぎ、且、地表、
を、含す、
分栽するの數、每、反、凡、四、千、五、百、苗、と、し、稠密、

過くせし、却て害あり、

移栽の後、凡一旬を經、曾て覆ひし所の麥稈を
除き、水肥を澆き、次、堆肥糞施、水肥を施し、
莖葉及、及、いざらゝむる莖要す、

火酒の糟を、水に溶解して、之を澆き、又、直、堆
肥不和して、用うれば、烟草、能く火を引き、且芳烈
の味、大に佳なる所あり、

七月上旬、不、至り、瓜、及び、莖頭、摘、斷、し、爾
後、一旬に、して、葉、間、復、新、芽、生、じ、從、ふ、て、生、を、れ
ば、從、ふ、て、摘、去、を、此、時、葉、面、些、の、黄、色、を、催、じ、之、を



色「モトリ」と稱、

八月上旬、不、して、黄、色、倍、深、
く、下、葉、より、葉、頭、まで、漸、く、
枯、槁、の、状、現、す、之、を、採、収、
の、時、期、と、す、乃、ち、手、不、て、下、
葉、三、四、葉、摘、取、じ、之、を、上、
葉、と、稱、し、て、下、品、と、し、又、數、日、を、經、て、三、四、葉、採、
る、之、を、中、葉、と、し、又、三、四、月、を、經、て、八、九、葉、を、収、
む、之、を、本、葉、と、稱、し、上、等、と、し、是、日、直、し、本、葉、の、上、
部、を、採、る、所、の、天、葉、採、収、む、品、位、尤、下、劣、なり、

烟草栽培乾燥法、三次あり、これを垣根乾、牛乾、地乾といふ、地乾、畢りて後、手を以て、葉面を摩擦する、寂々として、響なき者を、乾燥適度の証とす、

凡、一反の収量、大約、本葉、百六十斤、中葉、三十九斤、土葉、十六斤、天葉、二十四斤、合計、二百四十七斤、栽培通常といふ、

第九 藥草 人參

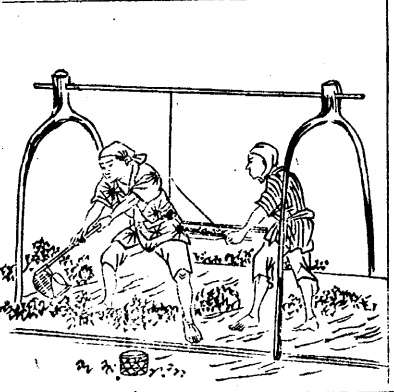


藥草の培養、其地味ふと、農家の大益、栽培者なり、然して、藥草の種類、許多なりといふ、従来より、人參を第一といひ、方今、専ら、支那、朝鮮、輸出する、栽培、以て、其價も、亦、騰貴せり、茲、出雲國、人參製造會社の培養、及び、乾法を、畧説し、併せて、一年間の賣額を述ぶ、

人參栽培、培養する、前年、寒時、土壤を耕、一畦、馬糞、百二十貫目を撒布し、秋分、不至て、再び、耕、霜降の前、土を篩過して、砂礫を除き、平地より、大約、一尺を高くし、且、每畦、二尺、五寸、間

てし細渠を設け、藁戎以て、搭棚を造り、十一月不
 至り、一畦ふ、四百三十八孔戎穿ち、一孔ふ、三四粒
 を下し、翌年の春、八十八夜の候ふ至りて、芽を發
 す、其後、手を以て、土戎勻和し、其良苗を撰ひて、別
 所へ移し、即、一畦、四百三十八苗とし、毎年、春分の
 候、畦間の細渠を浚ふ、四年ふ至りて、實を結び、七
 月紅熟し、五年の後、白露の候りて、始えて根を
 掘る、
 人参戎乾きふへ、其工程を経ること、六次なり、第
 一、人参の品位を分つ、第二、根鬚及び莖戎截り之

戎洗淨し、第三、淨根戎、三十五品に分つ、第四、釜場
 にて、根を釜中へ投し、熱氣の根心へ徹せざる前
 迅に出して、熱氣を扇冷す、第五、焙爐場にて、一の
 烘箱ふ、百三十根戎並列し、華氏、百十五度の熱度
 を以て、放置すること、三時
 間、根の皺縮を生ずるに至
 る、其熱度戎節に、培乾へ
 凡二日、乃至八日ありて、全
 く畢る、第六、焙製せし人参
 を、精撰して、各名稱戎與ふ、





バ、信濃、肥後等の諸國之を産出す、

第十

夫也、農家不関する諸業ハ、前篇既ハ、繰説し竟る
我以て、茲ハ、國の貧富ハ、農業の精不精不在るの、

名稱、二十四、其中、旭記我以
て第一とい、九、一歳の産額、
二萬七千四百斤餘ありて、
之我賣却して、得る所の價
金七萬七千五百圓餘なり
とい、其他、岩代の會津、及

一條を掲げて、此篇の結尾とす、

農務の、立上ハ、大切なるハ、特リ、本邦のみハ、何ら
以、萬國、悉ク、農業を奨励し、物産我、興隆さんと、企
てさるハ、なり、是れ、蓋シ、農業の盛否ハ、國家の興
廢、汚隆ハ、関する、尠少ならされハ、なり、

試ハ、海外、萬國の景状を察するハ、文明の域、開化
の區と、稱する地ハ、最も、農事我、重シ、物産を産出
せリ、英吉利、佛蘭西、及び、米利堅、合衆、聯邦等の、諸
國ハ、農事、最、進歩シ、人力ハ、換ふるハ、種々の器械
を以て、きねバ、一人の勞力と、雖ハ、五人、或ハ、十人、

の用を為けおと多く、物産も随で増加せり故
に、國家殷富安寧ありて、人民の新業を就き、新産
を興し、新利を攫取せしむること、洪大なるれども、これ
も反し、魯西亜、土耳其、二帝國の如きは、疆域大なる
も、農事尤疎かりて、只管心を戦闘殺伐のみ
留め、朝も剣戟を研き、旌旗を翻し、夕も兵馬戎
馳驅して、隣邦を侵入し、寸攘尺取、僅も版圖を擴
むるも、これが為め、國民を以て、砲烟彈雨の間、
苦み、先妻子離散して、饑饉も逼り、慘然見るに
忍びざるに至るあり、是を農の國の本たるの大

道不背き之、成奨勵せしめて、貧益貧を陥りたる
をり、

彼の佛蘭西の如き、先年内、紅外患相踵き、竟も普
國の為め、敗られ、巨額の償金、拵拂ひしり、國民
悉く物産、興起の四字を忘るべし、大も農事を奨勵
せしむる、忽ち、頽瀾を挽回し、今日に至りては、昔
日の富裕を復せしむるのみならず、更に倍獲せしむるの
情勢なり、是を農業、成務あるより、生きたる所の微
効ありて、彼の魯西亜、土耳其等、比ぶれば、其得
失如何ぞや、



米利堅合衆聯邦の一なる、カリホルニヤ州ハ、開拓、日猶淺くして、小麦の耕作を、初より、以來、未だ二十年の星霜も満たさざども、既ハ、一百万町の麥畑栽培、らき、別ハ、又、五十萬町餘の耕地を開墾せり、然して、之、我耕鋤する所の農夫ハ、僅ハ、十萬餘人なれども、昨明

治十一年間ハ、此一州より産出せる、小麦の總高ハ、四千萬苞ありといふ、此地方の物産ハ、年々増加して、昨年の如きは、既ハ、前年ハ比し、一億弗餘の増額哉、見るハ至れりと云ふ、
「カリホルニヤ州ハ、既ハ、かくの如く、米利堅全國ハ、昨明治十一年間に、収獲せし所の、小麦ハ、其總高、四億三千四百萬苞ありて、内七千二百五十萬苞哉、千三百艘の船舶ハ、積み込之を、海外ハ輸出し、九千六百萬圓の代價ハ、販賣し、其後、又、一千九百萬苞の小麦哉、四百萬桶の麩粉と

なり、之を二百六十三艘の船舶に積み込み輸出せりとす。

米利堅合衆聯邦より、此二十餘年の間、海外へ輸出せし、小麦の金高は、二十億弗の巨額ありて、本年の一月中、カリホルニア州を出帆し、我横濱を経て、支那の香港へ船送せし、麵粉のみも、凡七萬五千圓の金高なりと、

諺に云ふ、鏡は對して、其面の醜美を知らず、他人の風俗の善惡を我に見て、我の風俗の良否を悟ると、實に適當の言なり。之を本邦現今の農事に於ては、

亦然り、我邦へ氣候といひ、地味といひ、海外より比類をくなく、沃地なきは、農業を盛ん大にする利潤ならざるや、殊に運輸へ最便ありて、我邦より支那に至るは、彼の米國より、香港に至るに、比すれば、四分の一ふて、足るに、費用の差も、亦少ならずなり。

凡、我國民たる者へ、須らく茲に注意し、海外人を以て、獨斷私をせざる可し、

小學農家讀本卷之三終

K110, 6-18

農科小學入門 松本英忠著 全壹冊

該書ハ文部省出版小學入門ノ體裁ニ倣ヒいろ
ハ圖五十音圖算用九々圖ヨリ農科必用ノ器械
動植物等ノ画圖ヲ加ヘシ單語連語ニシテ農家
學校生徒必讀ノ書ナリ

小學農科初歩 松本英忠著 全壹冊

該書ハ農家一般ノ事業ヨリ田園牧畜製造等ノ
大畧ヲ記載セシ書ニシテ口授書トナシ又ハ讀
本トモ為シ得ヘキ珍書ナリ

小學農家讀本字引 秦伊三郎編輯 全壹冊

明治十二年一月廿日版權免許

價十三錢

著者

大阪府士族

松本英忠

大阪府東區伏見町二丁目
廿一番地

出版人

大阪府平民

前川善兵衛

大阪府下東區南久宝寺町
四丁目三十五番地

全

山口恒七

大阪府下東區北久太郎町
四丁目五十一番地

農家讀本